

図-5 は都心部を拡大した衛星画像である。市街化の過程で都心部において多くの緑が消失したが、それでも図-5 に示すように皇居や新宿御苑、赤坂御苑、神宮の森、上野の森等のまとまった緑が残っている。また東京緑地計画における環状緑地帯は実現しなかったが、その計画の中で隅田川や多摩川沿いの緑地や、砧公園や水元公園等のまとまった緑が残された。

図-6 は首都圏域およびその周辺における明治 40 年から現在（平成 13 年）までに消失した河川・水路網分布図である。図-7 は首都圏域およびその周辺において明治 40 年頃以降に新しく出現した河道・水路網分布図である。図-6、図-7 に示したような河川・水路の増減を通して現在は図-8 のような河道・水路網分布状況になっている。約 100 年前と比較して現在は首都圏域内において水面が大幅に減少している。特に中川・綾瀬川流域下流域の氾濫原では明治 40 年頃に比べて約 80% の河川・水路網が消失している。しかしながらそれでも東京の中西部の丘陵地には多摩川、目黒川、渋谷川・古川、神田川、石神井川等、また東部の低平地では隅田川、荒川、中川といった規模の大きい川が流れており、都市の骨格を形成していることが知られる。

4. まとめ

本研究で得られた知見をまとめる。1) これまでの我が国の都市域は、急激かつ圧倒的な都市化の圧力により、都市の無秩序な拡大を抑制しようとした各都市計画は十分な効果を挙げることはできなかった。2) 急激な都市化により都市内の緑や水面（河道・水路網）はその大部分を消失したが、それでも首都圏およびその周辺には都市の骨格となりうる河川や、量的に少ないとはいえ、まとまった緑が残されている。

図-1 に示したように、今後 100 年間で日本の人口は急激に減少することが予測される。このような状況下においてはこれまでのような都市と経済だけではなく、自然と共生した持続可能な都市の経営と管理が求められると考えられてよい。また自然と共生するという視点から、流域圏・都市の再生が実践されてよい。その際、本研究で指摘したような残された水面（河川・水路）やまとまった緑は都市の貴重な財産として活用されてよい。また暗渠化された河川・水路を復活させることで、自然と共生した流域圏・都市の再生に資することが考えられてよい。

参考文献：

1) 吉川勝秀：河川流域環境学，技報堂出版，2005. 3

2) 石川幹子・岸由二・吉川勝秀編：流域圏プランニングの時代，技報堂出版，2005. 3

3) 「自然と共生した流域圏・都市の再生」ワークショップ実行委員会著：自然と共生した流域圏・都市の再生，山海堂出版，2005. 2

4) 石川幹子：都市と緑地，岩波書店，2001. 1

5) 吉川勝秀・本永良樹：日本における川と国土の変遷および今後モンスーン・アジア地域で予想される河川環境に関する問題とその対策について，建設マネジメント研究論文集，Vol. 11，pp. 293-300，2004. 12

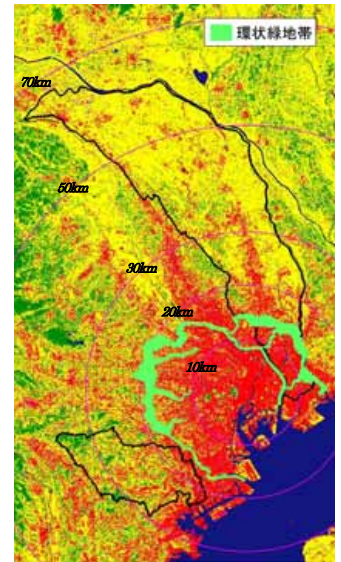


図-4 東京緑地計画における環状緑地帯と土地利用状況 (2000/11/24)



図-5 都心における土地利用状況 (EOS-Terra/ASTER データより)

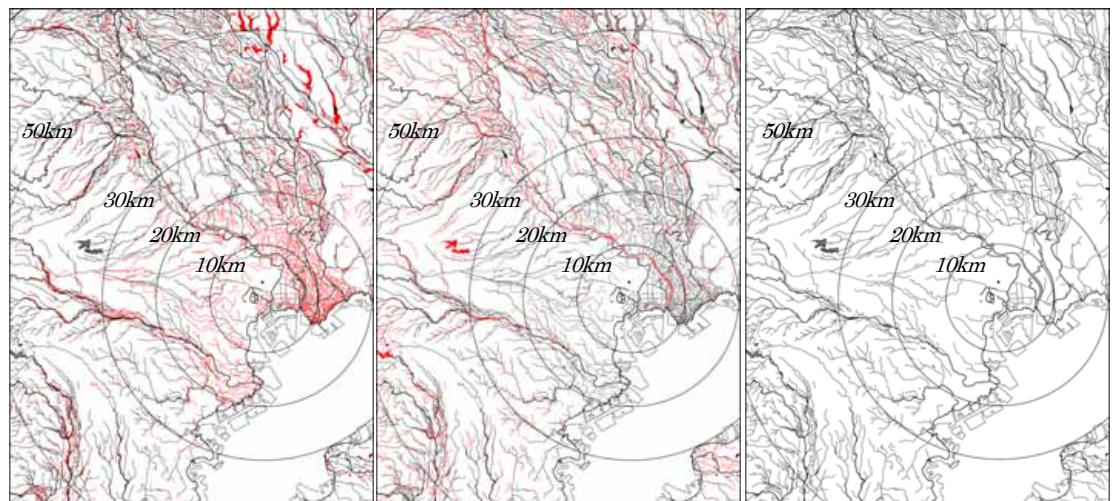


図-6 河道網の消失
(明治 40 年頃と平成 13 年の比較)

図-7 河道網の増加
(明治 40 年頃と平成 13 年の比較)

図-8 現代の河道網
(平成 13 年)

(図-6、図-7において赤線がそれぞれ消失した河道網，増加した河道網を示す。)